

古代朝鮮 25°
東緯 153°
史記(大) 土 38° 40' 39"

2261-1/2 1/2
紀上 272°
2,258-1/2

11月2日に葬る
記(理) 135° 134' 75"
71° 773' 204
2987-1/2 2258°
2253°
2260° 54'

第三十五章 悪阻の儀式

伯葬する者、奴婢百餘人
餘です。

崇神記は、倭日子命(垂仁天皇の同母弟)

この王の時に、始めて陵に人垣を立てき

と述べている。(崇神記) 皇書記(上) 皇真文書大系 岩波書店 七二頁

十月五日に(垂仁)天皇の母弟倭彦命薨りまふ十月二

日、垂仁紀二十八年(十一月三日)条に、

倭彦命を身狭の桃花島坂に葬りまつる。

とある。

この物語では、これまで度々述べたように、

一般の王族箕子(紂王の叔父・名は胥余)の子孫達が、一般代から絶えることなく

④ 2:54^P

死(死) 134^P
紀上 272^P

2,258^P - 2/2

紀上 272^P

④ 3/3^P 7/8^P 要 4177.00
④ 71^P 204^P

伝えらわされた。日殉死の風習を、箕子達の
国(百余国)の極南界(八代・宇土地元)に
倭人社会にも大々したものであろう。居着いた
と仮定してきた。(荒筋、第一編、古墳の変
遷についで)。荒筋、第三編の冒頭。第二章
へ箕子朝鮮国。第七章へ箕子統治下におけ
る倭奴国。第八章へ殉死等の項において既述
箕子達の風習を見ならしたのかは明らかで
ない。↑↑↑ 垂仁紀二十八年条によれば、
「倭日子命(倭彦命)が死んだ時から以後
近習者を集めて、こわらの者達を生きながら
に陵の域に埋め立てるようになった。↓
↓ 古の風として下はるかな後代にま
でも伝えられてゆくことになった。↓
と解される。

もつとも
へ殉死させた後に墓へ埋めるのではなく、
生きながらにして陵の域に埋め立てる。↓
という残酷極まりない殉死の風習が、
箕子達から倭人達へ伝えられたのか、

こと

第2巻概 * インドネシアのニースでは 改革に
あたって、奴隷を救済するという。
H21.6.4 ⑥ 2254-3/3 8行

2254-3/3 8行

天つぎ
改行

2,259 P-1/2

天つぎ
改行

・それとも、倭人たちが自ら始めたことなの
か

と、いった詳細について、詳細は分らない。

■ あえて言えば、
① 倭国初代の大王（はつくに）しらす天皇、崇

神天皇）の御世に、早くも、殉死の風習が其

子達から伝えられ、倭人社会にも存在していた。

② 垂仁天皇の同母弟、倭日子命以後、

式（悪阻の儀式）
が執り行なわれるようになった。

という、ことなのかも知れない。

* 今後の考究を待ちたい。
（第三十四章 懐妊の儀式）

*

■ ともあれ、倭国創建後あまり年を経ない頃

の、社会において、

へ、生きながらにして、陵の域に埋め立てる

という、殉死の風習が、始まったようであ

近習 2602P
主君の側近に仕える者

2.259P-3/2

いた 傷おし 119P
2259P-3/2

紀上280P
記(聖)153P
" (聖)115P

→→→
改頁
から

る。
また、重仁天皇崩御の後、常世国から帰国した田道間守(新羅の王の子天日槍の子孫)は天皇の陵にまいると、大声で泣き叫んで自ら死んでしまったという。(第1表参照)
即ち、伊都の国王田道間守は「重仁天皇を慕って殉死しよう」と決意し、大声で泣き叫びながら「自ら死んでいったのだからうう。」
生きながらにして自らその身を捧げるといふ美しくも傷ましいその殉死の様子は「人々の胸に熱い感動を与えた」
ない。
こうして、経緯があつて、
身分の高い者が亡くなった時、その人に仕えていた従者(等)が、陵の域で大声を出し泣き叫びながら殉死する。
という事は、どうしても欠かせぬ出来事である。
重要な儀式の一つになつてしまつたと想到される。

②

$$241 < 1364^p$$
 $2,260^P$

15-22 12/17/00

誅殺 罪ある者と殺す也

前頁戊

のように述べている。
 の倭国における日殉死の風習について、次

王を立てしも、國中服せず。更と相誅殺し、
 徑百餘歩、徇葬する者、奴婢百餘人。更に男
 卑爾呼以て死す。大いに冢を作る。

當時千餘人を殺す

達ひがみ車み彌み呼こにい殉いんじて死んだといいうのであいる。

一か
一な
から、
百人
以上
もの
奴婢
が殉
死す

う
に
は
、
それ
なり
の
理り由ゆう
が
あ
った
筈はずで
あ
ろ

その背景ともいうべきものを、想像を逞たくま
くして探ってみよう。

トル
さてい
火男の肩か山の神の腹中深くへ送り

に宿ることか出来たのだからううか。

い
う
ま
で
も
な
く
い
す
ぐ
に
~~分~~
る
も
の
で
は
な
く

火男が山の神を愛した時から数えて一

ひ
お
と
こ
や
ま
か
み
あ
い
と
き
か
き
か
き

現在の数え方

→ 560,64⑤

2,261 $\frac{1}{2}$

つわり 1508' 家庭の医学 6412

みどり 身籠る 2110

大つわり 妊娠24ヶ月とある 560.6.3⑤ 1508'

三ヶ月（妊娠二ヶ月）四月）ほどたつた頃に、
突然、御子懐妊の証がある。
「公辞苑」へつわり（参照）
つわり「悪阻の苦しみが始まることによ
って、やつと身籠った」妊娠したとい
う事実を知ることが出来るわけである。
後日子命の時に始めて陵に人垣が立てられ
悲壮な田道間守の殉死によって、山の神の悪阻
（陵に人垣を立てて殉死させる儀式）は決定的な重みを持つに至ったと思われる。
△山の神は、悪阻の苦しみを経た御子を生めるのだ。と考えられたのだろう。
数名の近習の者達が、陵の域に埋め立てられ
大声で泣きながら死んでゆくことになったよ
うに推察される。
都中はいま、
へ誰か、悪阻の役を引き当てることとなる。
のだらうか？
という恐れに打ち震えていた。
女王日御子を葬る時、あれほど殉死する

旧式の数え方（現在もこう）

こ

天つき
改行

2.26^{P-2/2}

はろはろ^ネ古の凡^金2258^P左^左紀上272^P
氣をもむさき

紀下294^P

を越望した者達にとつてやえ、
髪を断られ、股を刺さる (孝徳天皇の)

大化二年三月糸参照

悉に生きたからにて陵の域に埋め立て

られ、昼に夜に泣きながら遂に死に、爛ち屍

れて、犬や鳥に食ひ荒さる (垂仁紀二十

八年糸参照)

のは、いくら古の風 (垂仁紀二十八年糸

といえども堪え難く思われるのだっ

た。

人々は、月を見ては、はらはらと悲しみを

募らせ、

あの月が欠けたままであってほしい

と、甲斐無いことと知りつつ、ただただ祈っ

た。

*

尾末
とすかみわらす

2263^P-1/2

2262^P-1/3

2262^P-2/3

「話を進めてゆきたい」
2263^P-2/2 未

のひびと 1004[?]
詳

「亡人の為に、髪を断り、股を利いて誄
(貴人の死を悼むこと)——てもいけなり
とある。

察するところ、

①の前後はともかく、

②の後段は「悪阻の儀式において殉死さ
せられた奴婢たち(魏志倭人伝)」

を指しているのだろう、と思われる。

＊

また、さらに述べると、先に引用した孝
徳天皇紀の大化二年(六四六)三月二十二日
条に、

「強に亡人の馬を殉はしめ、云々」
と記されており、後代においては、
人だけでなく馬をも殉死させていたことが分
る。

雄略記九年七月一日条に、
「陵」

しゅんめ たちま 元
駿馬 1078' 忽ち 1379'

あしげ 元 34' 草毛
あしげ 元 34' 草毛
あしげ 元 34' 草毛

2.262 P 3/3

いつひ 元 484' 選品

紀小 279' 紀上 485' 宇治 279'

7月1日に 月はない

たなへ 田口

と馬匹との深い係りを示す次のような説話
述べらるゝ。飛鳥戸郡（大阪府羽曳野市飛鳥あたり）
の人、田辺史伯孫は、娘が男の子を産んだと
聞いて、聳の家へお祝いに行き、日月夜に
帰つてきた。誉田陵（応神天皇陵）の下で、伯孫は赤馬
に乗つて、いる人に出会った。その馬は、龍の
ように首をもたげ、急に高く跳びあがって、
鴻のごとくに驚いた。普通の馬とは異なり、相
違ひていた。伯孫は、この馬が欲しくなり、乗つて
赤馬は忽ち抜いて、遙か彼方に小さくなつて
いった。伯孫の馬は後れまゝ、後を追
うこともできなかった。この駿馬に乗った人は、伯孫の願ひを知つ
て、停めて馬を交換し、別れの言葉を述べると、去つていつた。伯孫は、駿馬を得て大いに喜び、厩に入れ

⑤
25
485

②2987

九川の底に記す壺形土器
③3003
②2987 2,263-2/3

表②2207 正始9年(248)/2月5日
②2992 姓の(249) ②2258
儀式 正始10年 ②2368

つづかな 志(149) (無事に)
リム47 臣月 ②2332
身記る ②2110 女 ②2247

高塚の腹部(に)

身籠った日から数えて十月十日後の月満ちたとき

高塚の腹部から恙無く御子が誕生し

ますようにとの願いを込め

満月の夜に悪阻の儀式に執り行ない

近習の者達を傷つけ、生きながらに陵の域に埋め立て

めでたくなかつたろうか

といふなかであつたろうか

回とはいえ四世紀以降、天皇(大王)

陵以外の墳墓では九州・中国・近畿

などの全域で、殉死者の身替りとしての日埴輪

の底に孔のある円筒埴輪を立て並べ、上端開口部に竹筒

③殉死者の身替りとして、日埴輪(底部穿

孔土器)が天皇陵に採用されるようになった

のは、垂仁天皇に相当する、欽明天皇の

御代(すなわち六世紀)のことであつた

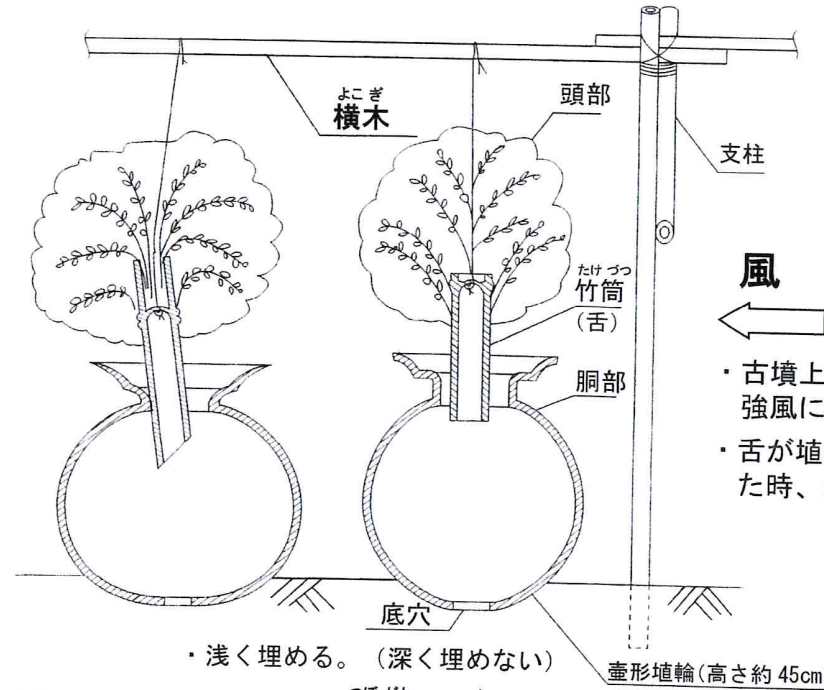
と解して、この話を進めてゆきたい(第1表参照)

なお、日埴輪の起源については、第五十

二章において考察したい。(第23図へ壺形埴輪の想像図参照)

2,263^P 3/3

新ヤ 1-170頁
第23図と同じ



- ・古墳上を吹きわたってゆく強風により、舌が揺れる。
- ・舌が埴輪の内面にぶつかった時、大きな音が出る。

・浅く埋める。(深く埋めない)

第320図 4世紀ころ出現した^{つぼがた}壺形埴輪^{れつ}列の想像図(奈良県桜井市茶臼山古墳)

*かなり遅れて作られるようになった人物埴輪は、いうまでもなく、声を出~~しません~~。

さないで

引主つた 身尺 元 2255

ほうし 奉仕 元2015 (ニ) つつして仕えること。 お仕え 2266

なきとよむ 泣き響む 元1653

2273 2269 2,264-2/2

紀88 24

紀上88 00大仕えの女婢

てきき 通算 1522

させるといふのであれば、当時の止むなき風習
として、誰もが是認し得たのであつたかも知
れない。と想察される。
ところか、何という狂気じみた沙汰だろ
う。
男王素戔鳴尊は、
へがつか日御子に仕えてゐる奴婢達の内か
ら百餘人を適宜選人で、夭折なすめよう
としてゐるのであつた。(神代紀上第五段本
文、へ夭折参照)
それは未だ會て聞いたこともない人数であ
つた。
こうして、さすがに広大な都も、いまはた
だ「オンオン」と泣き響む人々の悲しみに、
すっぽりと覆われまゐつてゐた。
邪馬台国の女王日御子(卑彌呼)のおそは
て日々御奉仕してゐた者達は、死ぬこと
の定まつた者も、そうでない者も、素戔鳴尊
の常軌を逸した暴挙に對して救ひ償をおぼ
え、煮えくり返るほどの反感を抱いた。

あ割の 2266 5折

え ーかし、そんを騷然と一た非難の声にさ
素多鳴尊は少しも動ぜず、こう嘯くの
だった。
姉。日御子を葬るとき、皆が皆、後を追
つて死にたがっていたではないか。喜んで死
んでゆくがよいし
■ そーて、そんな素多鳴尊を諫める者は、彼
のまわりには誰もいなかった。

米

対して
前頁19行

18年12月
 116P
 1502P ⊕ 2264P/23
 正始10年(249)正月15日

■ 定めの日(さだめ)の二・三日(ふたみっか)前(まえ)から、人々(ひとびと)の心(こころ)を憐れ(あはれ)
 むかのよう(ごとく)に、冷たい雨(つめたいう)が降り続(つづ)いていた。
 「何(なに)という冷酷(れいこ)な男王(おとこのおう)なのだろうし
 「血(ち)も涙(なみだ)もない無慈悲(むじひ)な王(おう)よ」
 ■ 人々(ひとびと)は、素戔鳴尊(すさのおのみこと)の如(ごと)く「あまりの所業(しょぎょう)に対(たい)
 し、どうも耐(た)えられやうもない。憤懣(ふんまん)やる方(かた)ない怒(いか)
 リと絶望感(ぜつぼうかん)を抱(いだ)いた。
 「ああ、恐ろしい恐ろしい」
 浅ましい(あさましい)といへども世(よ)の中(なか)になっ(な)ってしまっ(しま)った
 ■ 女王(きうわ)曰(いは)く「御子(みこ)にお仕え(しゑ)してゐる者達(ものたち)は、――
 まもなく死(し)におもむく輩(はい)の不運(ふえん)を慰(なぐさ)めるた
 めに、次(つぎ)から次(つぎ)へとやつてきては、生(せい)と死(し)と
 を分(わか)つ仕切(しきり)にとりすがり泣(な)き崩(くず)れた。
 *
 ■ トル　さで　いよいよその日(とうじつ)の朝(あさ)を迎(むか)えたか、悲(かな)
 しみに包まれた都(みやこ)は、なおも烈(トール)しい雨飛沫(あめしぶき)に煙(けい)っ
 ていた。
 ■ ガンとう　最中(さいちゆう)に降(ふ)る雨(あめ)は、泣(な)き續(つづ)けてき

→ 1/4.2.10 用

2147P

2.267P

降り頻る
1967P

冷たい 1502P

1004P
1の束を束で束にする
降る雨

た都の人々の胸に一層の悲しみを募らせ
また新たな涙を誘った。
↑↑↑↑↑太陽が厚い黒雲に遮られたままで
早くもその日は暮れようとしていた。
篠突くばかりの烈しい雨がただ降っている。
「もっとと降水。もっともっと降るがよいし
今日の夜中じゅう降って、明日も明後日も、ず
っと降り続いておくれし
人々は天を仰いで祈った。せめてその時が
先へ延びるようにと祈るのだった。
だが、皮肉なことに暮れを迫る頃となった時
――あんなにも降り頻っていた雨が途絶えた
あめただしく流れゆく薄墨色の雲の切れ隙
に、ボーッとその姿をみせた淡い太陽が、西
の方の空に低く、ひかにもたよりなげに漂っ
ていた。
とはいえず東の空を振り仰ぐと、真黒な雲が
垂れこめ覆いつくして、
満ちた月はおぼろげに透り出そうもないうちに思われを
うんなとき、後手に縛られ、王を敷いたよ

「ななし」前々々

2367' 山頂で 2065' 99' 金切声 438' 2268' 2273' 2270' 1057' 12 2271' 99'

うに連らなる百余人もの奴婢達が、宮城域西北
 の宮城門から、よたよたと現わした。
 奴婢達は、追いついていった。
 太陽の方へと歩いていった。
 暮色が濃くなつてゆき、いつのまにか、あ
 たりはすっかり暗闇に包まれていた。
 やがて日御子の塚が、空中高く、鮮やか
 に浮び上った。無数の篝火が、塚の処々に
 燃え上つた。たのだった。妙な息苦しさがあつた。
 と突然、夜中の静寂の中に、辟くような
 という女の悲鳴が響き渡つた。
 いやいよ、むかつくような悪阻が襲ってきたのである。
 何と、女の命ともいうべき長く美しい黒髪
 が、無惨にも根元から切り落されたのだつた。
 素き鳴雪の部下達は、自らの務めを果たす為
 に、人また一人と次々に後手に縛られた。
 奴婢等の髪を切り落していった。女達は哀
 かな金切声の悲鳴をあげ、墳丘の麓で、あや
 あ泣いた。(孝徳紀大化二年条「埴輪」
 伊達宗泰、保育社、三二頁、山頂の埴輪列参照)

次から次へと

2271' 1/2 99'

はたかく 192P 吹き荒ぶ 1924P
(はたかく) 505P

お惜む 301P
2,269P

わが背にうたふうきによる
5870P
226P 根元 1731P
226P 根元

2264-2/2
2273

こうして下 苦み悶える悪阻の声は、次第次
第に大きくなってゆき、いつか耳を聳する
ばかりの激しいものとなつた。
さらにまた引き続 素々鳴金の兵は、残る男達
の髪を毛を同じく根本からバツサリ切り落
ていった。
さの 鳴金の續鼻(禪)にたかる 蟻蛙 (うらみめ)
自由を奪われ、うしろとやれんのか素
は、素々鳴金の家来らを睨め、悪態をつ
き、怒鳴り付けたりしていたが、しかし
さすがに髪が刈り取られると、気落ちしたよ
うに肩を落した。
男たちは、髪を惜んで泣くわけではなか
ったが、無量の思いに咽んだ。そして、濡れ
出てくる涙が頬を伝って落ちてゆき、濡れた
大地を丘の上に 濡らすにまかせた。
雨で
燃え上る炎が、風に煽られ、狂ったようにはた
めいた。
暗い夜空を彩って飛び散る真赤な火の粉は①

1は^ん せ た 云、お た 云 261[↑]
 1238 追い 立て ⑤ 2268[↑]
 力尽 云 1422[○]
 1008[↑]

天空を乱れ舞い、赤い軌跡を描きつつ、
 すうつと、屠の奥深く吸い込まれるように
 消えていった。
 素戔鳴尊の配下の兵達は、やかて、玉を連
 らねるように繋いでいた縄を切り放ち、後手
 に縛られたままの百余人の奴婢達を力づくで急
 きたててゆき、陵の中腹にくさりと並び立た
 せた。
 見ると、足元には、——この時の為掘ら
 れた穴が口を開けていて、その穴のまわりに
 掘り起した土が堆く盛ってあった。
 「ここに死ぬのだわ……」
 気の弱い女はつぶやいた。
 「いやよ。わたし、死にたくないわ。こん
 なところに埋めないで」
 甲高い声が、どこからか聞えてきた。
 さらにまた、あちこちから、ワアワアと近
 きわめく声や、罵声なども聞えてきた。
 「——か！最早、そんな喚声と、烈しく吹き渡
 ったゆく風の音との区別さえつかなくなつて
 しまつていた。
 そんな時、どこかで合図の太鼓が一つ鳴った。

かま
構え 449'

心を圧した。

→ 560, 7.2 $\oplus$

「曲己下」
④ 2290
44

D 271-1/2 和所
 無味
 果敢 元 374^p
 太鼓 元 277^p
 鼓 2270 未所

628

H30(2018)6,6(K)~6,7(4回)
 H31(2019)1.24(木)~1.24(3回)
 令和元(2019)6.30(月)~7.2(4回)
 令和2(2020)2.8(土)~2.9(3回)

560.7.6
 H26.11.11

2,274

底強の 634
 (二)何と 2266

よう 天死 2269
 げきれつ 小材 596
 激烈

下 3/9
 3/9

ト 激烈な悪阻が続いていった。
 一 なあに、死産というところもあり、たとえ
 生れても夭死する場合が多々あるものよー
 血飛沫を浴びながらの兵達の格闘ぶりに見
 入って いるハ拳銃の男王 素戔鳴尊の顔に
 時折、いかにも残忍そうな笑がこぼれ、白い
 歯がのぞいた。
 一 そんな時、何とも大胆不敵にも 見
 から 遅しい若者が 刺された足を引き
 摺り ように ながら 素戔鳴尊を 目指し
 真直ぐ 猛進してきた。
 一 その男は、素戔鳴尊の方に向かって唾を吐き
 かけ、ろーて言った。
 一 お前は、人間なんかじゃない。――黄泉
 の国の亡霊め！